

統一

目 要 號 三 百 第

(明治三十年二月廿四日 第三種郵便物認可 全三十六年十一月十五日 發行統一第百三號 毎月一回十五日)

- 布教學の特置を要するの議……………清瀬貞雄
- ▲ 久成佛の大慈悲……………某 虔 寫
- 日什大正師傳……………忍 水
- ▲ 日什大正師傳餘談……………同
- 思連記(前號承繼)……………日 達 遺 稿
- ▲ 辻文學士の慶長法論批評……………教 文 會
- 秋のあはれ……………教 文 會
- ▲ 去勢法を執行せし僧侶……………清 瀬 日 憲
- 精神と形体との快樂……………清 瀬 日 憲
- ▲ 僧侶の妻たる人に。佛教婦人會……………真 龜 遁 舍
- 心の飢を救ふの法……………鳴 流 舍 生
- ▲ 窮奮の塵……………影 山 謙 二
- 憤懣語錄……………影 山 謙 二
- ▲ 儲け主義の演説。治國平天下の法……………紀 野 俊 耀
- 聖祖門下檀信徒に示す……………紀 野 俊 耀

品川町 購讀者諸君

統一團

統一購讀者君へ

荏原郡部 及 品川町の

妙國寺寓 松尾英四郎君

へ頼囑ましたから。已來は必ず同人へ御拂込を願ひます。一右統一代金は同人か又は同人の認印あるもの、はかは何人たりとも御渡しなさいやう頼みます。

一今般荏原郡部及品川町の本誌購讀者の蒐集方を

| | | |
|-------------------|----------------------|--------------|
| 佛旗六金色調進所 六金色價表 | 御寺院御幕 | 唐縮緬製 |
| 種形別並品製上品製新友仙本友仙染抜 | 在家用 廿二錢 廿八錢 卅五錢 五十五錢 | 寺院用 四十三錢 五十錢 |
| 同極大 七十五錢 八十八錢 | 〇 | 二圓二十錢 |

右外別大特大最大數種●國旗本友仙染抜四十五錢
御寺院用御幕●唐縮緬紫幕●天竺木綿及五郎丸白幕
京都市油小路魚棚南 吳服商 高橋正意
御本山御用調進所 電話千二百八十七番

一本誌代金不納の諸君は至急御送金ヲ乞
一雜誌交換、寄稿共移轉先へ願升

一本誌は毎月一回十五日を以て發行期日とす
一本誌は一冊六錢十二冊前金六十五錢郵券代用は一割増但五厘切手を其とす
一購讀者の届は住所姓名を附書にて認めらるべし
一爲替局は淺草區北松山町として御振り込の事
一本誌は別に領收書を發せず但し領收證を要する向は返信料を封入するべし或は爲替振込の節拂渡濟通知料紙錢を振出郵便局へ納付すべし
一廣告料は五號活字廿七字詰每一行八錢なり

明治卅六年十月廿五日印刷發行

發行人 井村 恂也
編輯人 山根 顯道
印刷所 鈴木 暉學
北澤活版所

發行所 統一團
東京市淺草區南松山町四十五番地

久成佛の大慈悲

(其二)

某 虔 寫

時に我れ及び僧衆の
 俱に出でしは靈鷲山
 語らん聽けよ衆生よ。
 常世の永き我なるぞ
 滅不滅とぞ現するは
 方便の力の故にあり。
 餘の外國の衆生が
 恭敬信樂するあれば
 我また彼に法を説く。

汝等此を聞ずして
 但我滅度と謂へるよ
 憐れは兒らの上にあるよ
 我諸の兒を見んか
 苦しの海の中にして
 浮きつ没みつ悶ゆなり。
 开を見し我はうの故に
 爲に我身を現はさず
 うれに渴仰を生せしむ。

統一主義

布教學の特置と要するの議

清瀬 貞雄

宗教宣布の第一要素なるもの何んぞ、曰く完全なる思想感情を誘發するに巧なる人物を得る是れ第一の要素なり、其之を得るの方法如何、曰く興學なり、曰く布教なり、興學は宗教宣布の原動力宣布者其人を得る主因なり、布教は其主義と活動せしめ能く之に靈化せしめむとする直動なり、去れば宗教なるものはこの二者相待て両輪双翼と致し、宗教の天職を盡くすに於て則ち天下の蒼生を信化せしむべく活動するに於て毫も不自由を感ずることなからむなり、

(1)

余は今茲に布教學と云へる新學科を特置するの要ある所以を認め、之を大方に議らざるを得ざるものあり、惟ふに布教は宗教宣布の生命なり、少くとも世の學術界に於ける彼の教育學以上の價值を有せる學科たらざるべからず、然るに我佛敎各宗派の從來實施し居る學科を閲するに、未だ組織的布教學

の實施せられ居るもの一も之れあるを見ず、之を我宗門中に徹し見るに舊式の講學方法を改めて、専ら學科の講授法を内容の意義發展に取り來りしものあるは、稍人意と強ふる感なき能はずと雖も、其甚しきものは猶未だ從來の名目條簡集解玄義文句、など稱して天台の書名を以て其位階の名稱とし、單に註釋的末書的一余は一も二もなく註釋的末書的講釋法を無視するものに左袒するものならず或る一の講究法を取らる場合には大に其必要を有し居るものなれども單に夫れのみ依れば達意的活動的に受講者の頭腦を發育するを得ざるが故に)にのみこれ依れるものさへあるに至りては達觀の明なきに驚かざるを得ざるなり、

更に眼を宗門各派の講學上に放てば、從來彼の權實論と謂ひ本述論と謂ひ、觀心論と稱し、本尊論と稱する此等の學科を一括し宗學として、所謂の理論として、學問として修めしめつゝあるを見る、

本述論一念三千論、素より宗門講學の大要目なりと雖も、これ正しく宗教的純正哲學學論とも謂ふべき深遠幽玄ある理を講ずるものたれば、高等なる哲學論を咀嚼する頭腦なき普通一般の數多きこの會社に向ひ、語を換へて之を云へば彼の目に物を見るにあらすむは何事も分り難き、直覺的人間の多き世の中に向て、單に一念三千の法門を論ずるも亦本述論を上下するも唯夫れのみにては、何等の効驗なくナントナク唯六

か、しいと云ふ丈は分かるとも、感化と云へる宗教の第一任務を全ふることは断して能はざるなり、

勿論此等教義學修の外に、問々實地演習と稱して或は演説を爲さしめ、或は説教をも爲さしめ言論の修養を以て布教の資に供することもなきにあらざれども、今茲に云ふところの布教と稱するものは、去る單純なるものにはあらざるなり、尤も彼の世に謂ふところの雄辨法なるもの及び又彼の修辭との與ふる智識は、或る程度まではこの布教學に於ては無論加へざるを得ざるものとは考ふるなり、然れども布教學は言論の巧、文章の優より夫れ以上の大なる職務を有せるものたるを忘るべからざるなり、所謂完全なる思想感情の誘發、換言せば完全なる信念喚起の要術を得る教家必須の學科たらずんばあらざるなり、

若し夫れ斯學其者の細目に至りては、第一教師信念の薰化、教師品性の陶冶よりして、斯學に要する各方面に於ける教義の脈絡及其旨歸、安心の精要等は云ふまでもなく、對本會行爲、對信徒行爲、及び信念薰發の機微を察する心得等に至る迄、苟も組織的一學科と爲すに於ては猶多くの稱成上に講究を要するは勿論なり、

然れどもこの新學科を組織するに對し、論ずる者或は謂はむ、布教は僧侶の天職なり僧侶の學ぶ所の學科悉くこれ布教の資となれり何んぞ別に布教學の一科を特置するを要せんやと、

固に然り大に然なり、されども事實は大に然らざるを奈何せん、

見よ、多くの僧侶中其技能を種別せば、彼の文字章句を分つに巧なる者、或は幽玄の理を談するに巧なる者、或は言論應答に巧なる者、或は文章筆論に巧なる者等、一伎一能一長一短の各自に技能を有せるものなきにあらざるべきも、今論者の言の如く僧侶悉く布教家たるが故に、布教の上に要する諸能を一般に布教的に得て、且つ布教的に長し居るもの耳なるや如何、天職は論者の言の如くなるも其修養の異なるものあるが爲めと、稟性の相異は各別の現象を呈し來りて、或は學者的人、或は言論的人、或は山水的人、或は實行的の人等を生み出せるにあらざるや、故に學者が學理として幽玄の理を釣るに巧なれば、开は學者と稱して布教家と稱せず、言論家が論辨に巧なれば、能辨家若しくは演説家と稱し得べきも、布教家と稱するを得ず、山水的人多く詩歌文章を善くし風流を嗜む故に或は之を仙人的若しくは高潔の士なりと云ふを得べきも、布教家と稱するを得ず、實行家が實行方面として例へば理財に長して俗に言ふ寺持が上手なりと云はば、或は事業家若しくは實行的の人間杯と云ふを得べきも、未だ必しも布教家と稱するを得ざるは何人も異議なかるべきを信するなり、

然らば則ち、論者の言の如く、僧侶の天職が果して布教

云は、其感化の要術を修得せざるを得ざるは理の當然にあらずや、然るに従來の如く唯漢然僧侶が學ぶ所の學科は悉くこれ布教の材料なりと云ふ計りにして、組織的布教學ならざるが故に、各自修了の後には各伎各能の長短差別の結果を呈し來り、天職たる布教家となり得るもの僅々に過ぎざるなり、其他は特別布教思想の厚きものが若んで各自に布後の要術を考慮するより外あらざるの現状なり、布教を以て生命とする宗教登斯の如く漫然茫漠たるものならんや、

論者或は謂はむ、組織的布教學なしと雖も能く爲すものは能く爲し、能く爲さざるものは能く爲さず何んぞ其學科の有無存廢に關せんやと、余を以て之を觀れば、この種の論者の如きは其一を知て其二を知らざるの言のみと斷言して憚らざるなり、所以者何論者謂ふ所の學科の有無存廢に關せず、能く爲し能く化する大技能を有する人の如きは、所謂先天感化の諸能力を具有せる人にして、是れ則ち特別の人なり、換言せば天性に於て既に能化となるべき凡へての手腕ある人なり、若しこの筆法を以て云はば、既に天稟に於て逸物たる以上はこの人に對しては、實に一布教學を要せざるのみならず、凡ての學科なども要せざるべし、开は學問以上の人なればなり、教育以上の人なればなり、學問教育以上に在る所謂地平線上の人たればなり、故に縱しこの種の人ありと雖も、特別にして取り除けに属するもの決して普通論の場合に持出す

べき議論にあらざるなり、

然れども學問も教育も要せざる程の人物は、ソナニ多く存在するものにあらず、而かも學科を精撰し、教育に學々日も亦足らざる如くにして猶且人物の出來難きはこれ世の中の習ひならずや、教育の等閑に附せられざるは多く論を待たずして、其學科の撰定は實に人物養成の上に欠くべからざる大鑄型なりと謂ふべし、豈輕々に看過すべきものならんや、

論者或は謂はむ、本化には自ら本化的の布教法の在るあり、則ち攝拆二門時機巧用を一に聖訓に則りて以て折伏布教法を取りて爲さば可なり、何んぞ、布教學を設くるの要あらんやと、この種の議論は本化の立脚地より見たるところの所謂の見識問題とも、主義問題とも云ふべきものなり、組織的布教學の上には何等の痛痒を感せず、故に論者の言の如く其本化的見識則ち其折伏主義なるものを巧に實行すべく、信念を本化的に誘發すべく、斯學の組織構成と大に絶叫する所以實に茲に在て存するなり、

若し夫れ主義の精神よりこの學科に命名せば、當に本化布教學とも稱するを得べし、布教學の組織構成登主義に背戻するものならんや、

僧侶の天職既に定まれるも、今は去る漢然茫乎たる範圍を謂ふにあらざして、世の學術界に彼の教育の一科と専攻し傍ら其學科を助くるの副學を修め以て、教員が専ら教育の業に身

を任せるものがあるが如く、僧員中特に布教師を以て任せんとするもの、爲めに、卓見の識、敦厚の資を有せる人よ、願くは宗教の生命たる將た感化の要術たる、組織的布教學の構成を企圖せられむことを切に茲に議るもの也矣、

各面評論

○辻文學士の慶長法論批評

客十月三十一日帝國大學に於て『慶長十三年淨土日蓮宗論に就て』と云ふ題に於て彼の史料編纂課員の辻善之助君の演説ありたり、其旨要するに日經は性來雄辯にして識才あり而も剛骨なりし、然れども彼は直言剛義こと更に當局者を怒らしめたるやの觀なきにあらず、而して相手廓山は家康の好遇を得たりしものなりしかども彼は其性よからぬものなりしこととは其證左多し、又判者頼慶は豫て日經によからぬ心を持ち居たりしものにして其行跡は頗る無類のこと少からず、而して彼の殿中間答の場合には日經敗北せりと云へることなるが然るに比問答中日經は一言も發言を爲さざりし(但淨土宗方の著書に弟子等が只一言四十余年未顯眞實と云つたと書いてあるけれど)後日經等の書きのこしたる多くの遺書には、其問答の朝早く多くの反對派は彼を其宿所に要撃して半死半生

となさしめたり、而して并を無理に戸板に載せ殿中にかつぎ入れ、強て問答を求め、日經の一言も應ずること能はざるを以て、乃ち敗論なしたるものとなし、袈裟をはきたりと云ふにあり、而して予(辻氏の事)之を思ふに幕府の方にては日經を要撃せしことは成べく蔽はんとせること歴々として見るが如しと雖、而も日經の方に矛盾少しも無きのみならず、之れに對するの反證もあらざることを以て考ふれば、彼が要撃せられて問答すること能はざりしや疑ふべからず云々、已上の如くなりしが、記者は此演説と傍聴なし總てを筆記してあれば、都合によりて掲載してもよしと思へるが、或は別に予の意見を以て大々の批評を加へんかとも思ひ居れり

○去勢法を執行せし僧侶

高知五臺山竹林寺眞言の船岡某(齡三十二)は陰囊を抜き去勢法を執行し、誓願して曰く熟々現今吾佛教社會を觀察するに、稀に持戒高德の高宿なきにあらずと雖實に曉天の星の如く、其多くは非法乱行至らざるなし、誠に知りぬ、我輩薄志弱行の凡僧は、物に觸れ、縁に隨て心の轉すること水の方面に順ふが如く、心此に定らず、四威儀則なく、恒に實相を違背す、是れ所謂頭を剃りて慾を剃らず、衣を染めて心と染めざるの輩、敢へて耻づるの色なく、三業の所作常に顛倒して廻の業因を造る、今や宗連日々に衰へ道徳日夜に頹廢す、國の爲め民の爲め、教界の前途誠に杞憂に耐へざるなり乃至教

之の術を應用したいものです(一)

○儲け主義の佛教演説

予このごろ一著作を爲す、序を在岡山の某氏に請ひ返書を得たり、封皮新聞紙なり、之を破るになじみ多き文字は直に瞳中に映せり、何とぞならんと見れば

●儲け主義の佛教演説 東京下りの太田柏堂とか云へる者過般津山に來り今町の若葉席にて佛教演説をなしたることは前號の紙上に掲げたるか全人は顯本法華退治と云ふを看板にして本多日生と立會演説をなすなど法螺を吹き立て傍聴券を二十錢宛に賣り付け居れる由なるが本多日生氏は過般明石の夏期講習會に臨み居たるも目下歸京して當地に在らざる人なれば之と立會演説をなすと云ふも傍聴券賣付けの手段なるべく且つ全人の舉動甚だ怪しむべき所あるより警察署にては常に巡查を尾行せしめ居れりと云へるが近ごろ宗教に名を籍りて山師の徘徊多きは忌はしきことにこそ

是れ本年九月二日の中國民報の記事なり、是れ儲け主義田舎だましの演説屋なり、斯の如きは宗教に纏ふ弊害と云ふべきか、さては又臭いものに蠅たかると云ふべきか、亦以て腐れたる目下の宗教に青蠅の群がる一斑を知るべきなり、それはさて津山には原田山名の驍得もあることなれば顯本法華もよもや名もなき山師に退治さるゝこともなかるべし、阿々

○佛教婦人會

界不振の夢を驚かし聊弘法利生の本分を盡さん云々、之に對して萬朝報は末法ありがたき清僧なりと云ふ意味にて眞面目に之を紹介をせるに反し、日出國の梅原氏は愚僧か名僧かと題して四十二章經の一節を引き、一時世を騒がせ、人目を眩せしめ、傍ら姪欲以外の利を貪らんが爲め、若しくは自己の虛榮心、好奇心の満足を買ふに過ぎずといは、余輩亦何をかいはん、と切口上を爲し、狂人の痴態、非僧侶と決論したり、其後其あたりの眞言宗の坊主連中はヤツキとなりて船岡の排斥に勉め居れるとなり、予輩思ふ、二十世紀の今日隱囊を抜くなご隨分の茶人的には相違なく、馬鹿の骨頂なるは勿論なるが、それを良いこなにして眞言のデモ連が之を排斥せんとするは苦々しきことにて寧ろ滑稽劇に類似せりと云ふべき也、萬朝の賞揚は外れたるものなれども、まさか日出國の論の如く貪利や虛榮心ではあらざるべし、貪利する如き男はとても隱囊を切るだけの勇氣は到底なきものなれば也、で船岡の此行爲は彼の『自誓羯磨誓文』と云ふにて頗る憐れなるものあり、若彼をして日蓮の未流に浴せしめ居たらんか、彼は厥然として布教に奔走する者ならん、教義の腐敗せる眞言の一僧としては此手段に出るもの大に憫察すべきものありと云はずんはあらず、否彼を攻撃するは大人氣なきを以てなり(老人傍にあつて曰く長命すると種々の事を聞きませぬ、しかし世には随分狎々のやうな人があります之れには是非

神戸に佛教婦人会起る、予輩の斯事を待つや久し、特に希望す各所に斯種の會の設立あらんことを、而して僧侶の婦人の起つて斯會の主領たるの勇氣あらんことを、僧侶も亦必ず已が妻を以て之れが周旋に當らしむべき也、教義上より認識せる本宗僧侶の妻たるもの、少なくとも真宗のれ、裏方までには其位置を上さざる可らず、徒らに世間よりいまはしきあだなをとりて満足すべきにあらざるなり、敢て囑望す

○僧侶の妻たる人に

本宗僧侶の妻たる人に望む、御身等の夫は無上道の弘傳者なり、御身等の生む所の兒は將に此道を繼承するの人なり、御身等の位置は決してひくきものに非ず、よく夫を扶けて正義の傳道を完からしめよ、夫の弟子を愛せよ、高尚なる氣風を養生せよ、世の女の模範となれ、知らざることは學べ、ひがひ勿れ、ろねひ勿れ、正道なれ、やさしかれ、而して身は假令女子たりとも如何にして此道を一人にも多く傳へんかと苦心せよ、これが爲に煩悶せよ、信徒に向ひ貧富によつて顔色をかゆる勿れ宜く平等なれ、夫をして弟子をして生める子をして家庭の趣味と與へよ、温かなれ、さげすみなかれ、卑屈に落ち入る勿れ、夫が傳道に出る時はいさめる色を以て送れ夫が傳道より歸りたる時は歡びの面色を以て迎へよ、乞食の來りたる時は什祖の御歌『門に立ち物こふ人のあるならばおはれと思へ施さずとも』たれ、而して殊に注意すへきは三

實々前に注意せよ、最も崇尊の念を以て身自ら御實前のあたり意せよ、さすれば夫も弟子も子も更に信仰を深からしむる縁とならん、かくて一家の平和を現出せん一家の温りを生せん、人間としての今迄絶へて知る能はざりし愉快を得ん、かくて他人をも斯の如く導くことを得ん

○治國平天下の法

自己の信仰の生じたる時は自己の平和を得たる時なり、自己の平和は夫婦の平和となる也、一家の平和となる也、一國の平和となる也、世界の平和となりたる也、天下萬民一佛乘に飯したる時とは是也、(以上團末某)

記者云前號「憤悻」ありしは活判國の誤植なり乞諒焉

憤悻語錄

影山謙二

○世人よ、記應せよ、予輩が言を極て現代の文明を痛罵する所以のものは、夫の偏狹なる自我的排他主義者流の言と其出處を異にする萬々なる是也

○夫れ、日本帝國は世界の日本帝國也、予輩も亦日本帝國臣民たると同時に世界の市民たる也

○されば、進化論や唯物論や功利主義や其他あらゆる現

○聖祖日蓮も亦法華經を祖述して宣説し玉へり「一天四海皆歸妙法に歸せよ」と

○思へ夫れ、世間通途のと同じ確信の一事を尙如何に況や出世の大事の宗教に於てをや、設し夫れ宗教家にして自家信條の一個半個だも有せざらむか是れ宗教家の假面を被れる以而非宗教家のみ

○殊に况や、身は本化の教流に處り心は一善實乘の法華經に歸依し奉り口には佛祖二聖の慈教を宣傳する者、争でか泰今不動の確信を以て天下に立たざらむ

○吾人は素より狹陋の頑見に坐して自我の妄想に驅らるゝを羞づ、而も吾が釋尊の大教義には三度び驚歎せざるべし

○而して復た、吾人は大恩教主、釋迦牟尼佛の金句名教に對して絶対に信受敬順の至念を捧ぐると同時に、又、釋尊の教旨に同如して善く契合せる世間幾多高妙の學見思想に依て銑鍊せられたる道法世教を愛するに恪ならざるもの也

○これ、予輩が總て一切の事物を鑑別し東西の文物を品隋し社會の事象を評論し乃至文明の是非を批判するに就ての把的規矩也準繩也、他語もて言はざるに之れ吾人の純一無雜なる至誠道念の動律にして一貫不改の絕對的本則たる也

○聖祖宣はく「法華を識る者は世法を得べき歟」と、嗚呼是れ而已々々々々予輩豈また他あらむや、止た予輩は信仰

代文明の病根が歐州に於て發芽し歐人に由て唱説せられたるの由縁を以て、之を嫉惡するものに非ず

○而して復た、佛教と儒教とが我東洋に於て發展し吾人の祖先に由て唱道せられたる由縁を以て、是れに誇慢するの非理なるを知る

○而して更に、予輩が隨喜以て信仰を捧ぐる處の大乗微妙の深法、即ち世界の輿衆が「大乘佛教は今や日本を措て他に求むるに所なし」と羨望し垂涎し謳歌する、佛陀の大法が唯り我大八洲瑞穂國に於て宜く其發達を擧げ、昔は「朕は三寶の奴なり」とまで宜ひ給ひし聖主の我歷代皇室の間に出席させたまひし事實的偉觀と神靈的榮光とを荷ゆる吾人も斯の至法を持てるの故を以て自ら高尚にするを好まざる也

○しかり固より爾り、宗教及び偉大なる學問は或特種の民族若くは特定の一國一社會を教域の限界として起るものに非されは也、殊に、宇宙の大も打て之を一丸となし其中に棲息せる人類の全体を悉く自家教權の下に統一せずば止まざるらむとする、是れ實に大宗教本來の眞目的にして其天職をた實に茲に存す

○大覺世尊は法華經に於て宣勅せられたり「今此の三界は皆な是れ我が有なり、其中の衆生は悉く是れ吾か子なり、而も今此の處は諸の患難多し、唯た我れ一人のみ能く救護を爲す」と

に因り 佛祖に依て得るの處知識を以て世の一切の愚論魔説と闘はむ耳。

顯本之尤

思連記

(前説つゞき)

故本昌院日達上人 著作

(本文)

まづ佛法を學び後世を願はん人は 必ずりんじうの様にしりて後世を願ひ佛道を修行すべきものなり されば當宗法華宗の心いよゝ臨終のやうを知る事かん心なり うれにつきて古徳の臨終の事とされるものはあり うちの中に始に中記といふ事あり 其心は天台大師妙樂大師などの臨終記あり 又傳教大師の修禪寺決と云ふ本あり うちの中よりすぐり出して當家の臨終記あり しかし今の臨終の心に初心、後心、中心と云ふ事あり 今は初心にあらす後心にあらす 然れば中心の臨終の事をしるすと云ふ心にて中記と云ふなり しかも中は初後をかねるものなれば、今時の初心後心に通じて法華經修行の僧も、尼も、男も、女もおしなべて此臨終の心にてある

相本四の問人

打暮す事こそあさましけれ さる程に我身の上の四本相を依報の草木の上にて思ひしれと云ふ心にて 草木の四本相をさきに明し知らしむる事なり されば人間の始めて母の胎内より生れ出るは生の位なり 是を生相と云ふ うれより成人して十五、二十、三十ばかりの頃は 榮盛んに住める處なれば住相と云ふなり、さて異の位と申すは 人々若かりし色よき顔もかはりて 四十五になりぬれば面もしばみ黒髪も白髪となりて むかしにかはる姿となるを異の位と申すなり 異の字をばかはるとよむあり さて正しく年よりて免るべきやうもなく 臨終にねよび死の時になりぬるを滅の相と申すなり 是を人間の上の四本相と申すなり 然れば我も人も念々にねもひ合せ千草萬木のありさまを見て なら仇なれや我身も聽てあの如く果てやゆくべきと 依報草木の上を見て 我身の臨終の事を思ひ合せつゝ、臨終正念兼知死期、本門壽量の南無妙法蓮華經と唱ふべしと云ふしめしなれば 古人の歌に 花のちり木の葉ながるゝ山川は 人を渡さんためどころさけ ともみたるは 依報の草木は人を濟度する心なるはさに 『人をわたさんため』とよみ侍りけれ 非情草木の上の四本相のすがたかくの如し 次に

終臨の報依

相本四

命終と云ふ事に二つの心あり これは先づ人のおはると云ふに 依報の命の終る事を知るが一つの心なり 依報とは心なき草木國土などの事なり、此非情草木の上に臨終のことばかりあり 是をしめし述る心は みな人あひあふものごとにつけて知らるゝ事と思ひあはせ 後世を願へといふしめしあり 此依報にまた二つあり 一には四本相、二には四隨相あり 此心は一年中にて沙汰する事なれば年中の四本相と申すなり うち四本相のかたちは 生相、住相、異相、滅相の四つの相なり 是を四本相と云ふなり さて生相とはもろゝの草木などの花の咲き芽を出す處は 始めて生るゝと云ふ生の字の心なるを生相と申すなり、さて此花の咲き芽の出るは春なり 春すぎ夏も來りて草木の技葉さかんにすめるは住の相なり 夏すぎ秋になりぬれば草木の盛んなりし青葉の梢も みな紅葉となりて色かはる處を異の相と云ふなり さて滅の字の心はもみぢして色かはり冬になりぬれば 千草萬木みな散り落ちて草の葉もかれ木の葉もたちて 梢さびしくなり果てたるありさまを滅の相と申すなり、滅の字は『さゆる』とも『はるぶる』ともよむなり 是を非情草木の上の四本相と申すなり 人間の上にも歷々どあるなれども 人々まよひて我身の上とは知らず うかゝると

四隨相

四隨相とは四つ隨ふ相と云ふ文字なり さる程に先の春夏秋冬の四季に隨ひて 生住異滅の四の相が各々にあるなり 春の四季にも生住異滅の四の相あり 夏の四季にも 冬の四季にも みな生住異滅の四の相が隨ふてある程に 四々十六の相があるなり 是を人間の上にて由せば 生れ出て早や死ぬるものあり また二十三年の年まで居て盛りになりて死ぬるもあり 四十五迄居て 異の位にて死ぬるもあり また年よりせまりて死ぬる人もあるにつけて思ひ合せ知るべきなり 其外刹那の生滅とて 一時一念片時の間にも生滅あり また一日のうちを人の一期とすることあり 誠におもへば夢の中なり 人の一期を過る事、ほどもなし 朝に眠りさめ起き出たるは生の位 朝がたより晝までは住の位 晝より八つに傾くまでは異の位 さて七つ過六つになり入相の鐘の聲をわびしく 初夜より二夜にもなりゆけば みな聞にどちこもりて寝るときは滅の位と申すなり 一日はまた長し 一時片時のうちにも萬よしなもの事につけて 生住異の四の相あるなり 是を四本相に隨ふて四の相あるなれば 四隨相とは云ふなり 然れば四本相四隨相の依報の上に我身を合せて 臨終のほどもなき事を知り後世を忘るべからずと云ふは しめし切紙の掟なり (未完次號續載)

日什大正師傳

松尾忍水述

誕生 (第二回)

父母子を八幡社へ祈ること、男子出生命名のこと

覺知は清玉姫を娶りて漆膠のなか睦まじかりしも年月を経て
 繼なく之のみを深き愁とせり、いかにもして、子を設けんも
 のど漣澤八幡の社に祈を草めしに、牙が靈應を蒙りたるにや
 日ならずして懐妊けり、頃しも彌生の空いどうら、かに、櫻
 に交せし糸桐をかすめて暗くはあけ雲雀、清玉は安産福子の
 爲にとて今日しも八幡社へ詣で社階二ツ三ツ登りけるに俄に
 産の氣づきて男子を出生しぬ、近習の男女わはて狼狽ともか
 くに傍間より湧き出づる泉水もて浴湯に充てしとぞ、今大塚
 山の麓にある誕生水は之なりと傳へり、日蓮聖人の正統を發
 揮したる日什大正師とは實に此の嬰子にてありけり、父母體
 愛特に深く玉千代と命名ぬ、時に人王九十四代花園院の御宇
 將軍守邦親王執權北條高時治世正和三甲寅年三月(又は四月)
 二十八日、運祖入滅より三十三年に當れるなり。

(因に云ふ石堂氏は館舎を大塚に移してより大塚を以て
 姓となせり)

幼時 (第三回)

玉千代歎智の事

漢土の天台大師は御年七歳の時唯一度にして法華經普門品を
 誦じ我日蓮聖人は三ツ四ツの頃世の七八歳の動靜あり、げに
 梅檀は二葉のたどぬ玉千代は三歳にして文字を知り給ふ、
 一日ことなり、父覺知磨を携へて他家に遊びけるに床上の一
 軸「節義」の二大文字墨痕くろく、なるを見てありしが、や
 がて家に歸りて持つにもかたき小さき手に筆とりあげ、其儘
 に此二字を書き寫し給へりとぞ、六歳にして既に五經等の外
 典を讀み給ふ其天才驚くほとにて舌を巻かぬ人とてもなし、
 至孝の心も亦ことの外勝れて行先いかに秀つるやらんと末頼
 母しく思はれけり

出家 (第四回)

父母死去の事、叡山に登る事

玉千代漸く成長ければ、冠辨の禮を了り名を權大夫國重と稱
 ふ、時に喜曆三戌辰年御年十五歳、さるにその祝喜いまだ終
 らざるに浮世の風吹きすさみて御父母ともにはやくも喪ひ給
 ふ、國重服喪の涙潜々として乾くによしなく、風につけ雨
 につけ愁腸思ひの種ならぬはなく、四季轉變飛花落葉にも胸
 せまるは有爲無常の世の態にて、此に出家得道せんことを思

以使札呈一毫畢抑貴殿深窓鞠有女曰清玉姫其志父母至孝
 而能順迎卻入予室婚姻者禮儀大者也於許容者家門繁榮基
 何克加之仍狀如件

二月 日 平 高 判

○盛宗も東國武士の氣骨が充分あつたに相違ない高時の婚談
 を一言に斥けてしまつた所を見ると、

○清玉の覺知に嫁した時には鎌倉から會津へ入興したものら
 しい、それは盛宗が鎌倉に詰めて居たのであらう

○今の瀧澤の妙國寺は石堂氏の舊跡である、

○石堂氏が館舎を瀧澤から大塚へ移してからは姓を大塚に改
 めた

○うの妙國寺の東方の田園に石邊櫻と云ふ老樹があつて、清
 玉詠めの櫻と云ひ傳へたうらだ、開花の時節には遠近貴賤
 が群り集つたと云ふことである、之に對する先師日臺の批
 評が面白い

夫雖非山高一依清玉之德稱此花乎依花麗知清
 玉乎花依清玉至孝爲造花増色香乎清玉以花發
 留佳名於後代乎桃李不言語與誰昔焉
 元和年中この誰人か老樹に短尺をつけたうらだ
 清玉の昔は遠し色香をば
 老木に残す花の顔ばせ

日什大正師傳餘談

忍 水

ひ給ふ、則ち心を決定り正慶二壬申年十九、いでや俗塵を脱
 して常住を求めんとて知巳のあるにまかせ當時日本第一の
 戒壇場たる近江の國比叡山に登り、横川の上智院慈遍僧正に
 隨ひて弟子となり翠の黒髪を剃落し墨の衣を纏ひ名を玄妙と
 賜りぬ、古し釋尊悉達太子たりし時御歳十九にして王宮を忍
 び出玉の冠錦の御衣を捨て給ひしにも似て、さすが名族に
 成長しも錦繡を脱し玉殿を出で會津黒川より遠く山海を越へ
 て身を叡山に投せしことのうらるに思ひ忍はれて哀れにも亦
 尊く覺ゆれ

○石堂覺知の父は高時を悪んで勇退した位だから氣骨のあつ
 た武士であらうそしかし其名が判然と分りかねる、が其子
 覺知には一城の主たる華名盛宗が已が女を以て配した位で
 あるからうら名もなき武士でなかつたことは明かである、

○盛宗と覺知の父とは親友であつたらしい

○北條高時が盛宗の季女清玉を懇望した書翰の文面が別傳記
 にある、其眞疑は分らぬが参考の爲に示らうなら

○誕生水が大塚山の麓にあるのだから、今の瀧澤に移したの
である

○此八幡移轉に就て孤山を築きたらうで、それを覺知が一
箕によつて土沙の價を定め、村人をして運ばしたので一箕
山と云ふらうだ

○社頭玉垣鳥居など當時のものは石堂氏の寄附に係るとの事
で
○この八幡社は海内勸請の一つで源義家が東征の時には當社
で休憩したとの云ひ傳へがある

◎左は日什大正師の傳記に關係を有す因て本餘談に収む、
大方諸君よ、かゝる類のものあらば爲宗至急御通知を乞ふ
統一記者足下

筆鋒益々御雄健爲宗國家大慶至極に奉存候統一の機運速かならしめ度存候
山間の僻地よりあまり珍らしき事には候はれども聊か物せんこそ描なき筆
もて清紙を懸し申度候開は拙子道般上總舟日本立寺へ食客とやらんを致居り
候處當山は申迄もなく本宗の開祖日什大正師の靈跡に御座候故にやいろく
の靈跡つづくこれあり候日々参拜の信徒隨分これあり候
日什大正師高僧を御厭はせ給はず正義弘通の爲に諸國御説法の折柄當地に
止まりて御足洗はせ玉ひたる其の地今に尙寺門の裏坂にありて如何なる早
歎の時と雖も源泉流々として逐に水の干たることなし又庭内に雄々しき古木
あり枝葉繁茂して殆ど雲上に聳へんばかりなりきこれなん所開什師の常に御
携帶遊されたる御杖にして師曾て弘法を申し吾が弘むる所の法果して吾祖日
蓮大聖人の御本意に叶はば此の杖に枝葉を生じて果實を結ばんと果せる哉其
の如くなりぬ御欣然として盛に弘法化導して逐に當寺を創立す云ふ其の熱
血其の御誠御眞に追慕に堪へんや
こゝに申上度は開祖の御杖たりし今の大本の櫃の木に年々數万の果實を得申

作陽吉ヶ原に篤信なる布教家吉田日梓師の遷化あり

鳥城に篤實の信者高木三次郎老の訃を傳へぬ
曩つ日難波の義妹よりうの父のいたづき今はとても起ちが
たき由を云ひこしぬ、只死ぬことを目の前にひかふるばかり
なりと云へば、年まだ幼なき彼れが小さき胸はいかならん、
さぞや心細きかぎりならん、
ろのなにはの便りありし明る日のことなり、故郷にゐます
母君病かるからず、すでにとりはずとところなりし少しく落
居たれど何れは浮世のながめながかるまじきとの音信あり、
わが胸は波うつまでに動氣は早さをましぬ、千里の山海をへ
だてしわが思は、この時のみぞ鳥はしやと思ひける

吊句

木がらしの三葉四葉秋のなごり哉
ろのまゝのしとねは錦なが夜かな

野菊

あはれは野邊の菊にあり
いたづらさがる里の兒と
牧こふ牛のおろろしき

全 詠

候遠近の諸信士當寺に参拜するもの必ず其の實を御符として持ち歸り候故何
に供せんやと尋れしに病者に與ふるなりと病者此を服せば必ず平癒すと茲に
至て予大に其の不可なるを叱して大問題となれり普通の教育ある有爲の士
ら如斯迷信に汲々たり予は大に其の土と戦争を聞かんこしつゝあり
吁々實に末法は五濁亂世の世寸善尺蠖の時なる哉信に餘念なくたのも
しく思ひ居り候へば遂に如斯迷信に陥り衆生の所謂信じて而も信ぜざるもの
となり是れ何の罪ぞ末法濁惡乎將た吾人の力たらざる乎
予は茲に坐ながら開祖の遺教を傳へ申候夫れ成佛の要道は本門三大秘法に限
るなりと古木の果實早秋の池水は唯開祖の深大なる御恩徳威に感泣するのみ
にして什師の生命を捨て、活傳傳せられたるもの開祖統一の大木尊を宇宙の
活舞臺に布演せんが爲なりと眞の妙法を信念受持すべき事柄なごを委しく説
き明して後日の戦場を約したり(上總舟日本立寺秋葉純一)

秋のあはれ

教文會員 なにがし

秋のあはれは、初めて知るにあらねども、今年はことさら
に斯く覺ゆるゝぞつれなし、
うら寒さ空にさら／＼せる星が、關の下界を照すところ、
何のうらみぞや小虫が一つたぬ／＼に唧々も腸には異様にし
みわたるなり、
政界に有名なる片岡健吉氏逝き、文界に明星崎紅葉子を逸
しぬ、世間におしき噂は此處かしてにこの事なるぞかし、
日露の雲行いかなるらんとは片時も忘れがたき人心、ね
ざりに幾度か驚きの夢を見ん人も少なからまじ

露も雨にもまかしのつれ
色香に勝りなきといへ
天の尊みをろなへたり

見よ星の宿は之れと笑み
月には思かよはしつ
日出るまゝにうるはしさ

たま／＼詩の使女の
さすらひ給ふことあらば
香ばしの口に賞たまふ

むげに折らるゝうらみなれど
はろさやはかの指さまに
つみてかささん花たらば

月

お月さまお歳おらくつで。
十三八ッ、二十一
去年も二十一なの。

全 詠

第百一號に「秋の詩」草、虫、月と連珠せしをいかにしけん「月」の一詠のみ
を掲げ漏しぬ、左はそれと知り給へや 教友會某白

今年も二十一ですの？
大方お嫁にゆくまでは。
いつまで経つても二十一？

◎消燈後の月

秋葉 純一

小夜風に照す燈火消へ失せて月の影のみ牙へ渡る哉

◎開祖靈木の果實を見て

日什の杖と知らはや色香よき皆悉具足の果實結はん

◎統一續號をよるこひて

咲き初めし妙の御法のかへはせは末幾千代も榮へ行らん

筆の雫

秋葉 純一

行秋や案山子の能も今日限り
新らしくして古す案山子かな
行秋や富士は其形生き姿
鐘の音も刈田に響く日和靨
去年よりも今年や勝る額の出來
丹精を拾ひ揚けたる落穂哉
秋の田の刈田に残る案山子哉
出來秋や稚兒も人井俵敷
出來秋や不影氣の聲もさかいぬふり
晴れてより雲り勝ちさや秋の富士

吉田日梓師遷化に就き其靈に贈る

左伯耆 伊藤 惠洪

靈山の淨土に君は行きませり
かたりし時ぞ今は忍ばる

紅蓮白蓮

精神と形骸との快樂

清瀬日憲師法話
溝口會 旭筆記

今日は諸君にこの精神と形骸との關係を陳べまして。諸君の現世に處して行く鹽梅より。平生の心得に至るまで大略れ咄いたしまして。本宗信者たるもの、信心上の心得を陳べて見たいと思ふのであります。婦人でも小供でもよく讀んで誰れでも知つて居ります。後の百人一首の歌の中に『嘆けどて月やは物をおもはするかこち顔なる我涙かな』この歌の意味は月と見てためいきをつけよとて。月が人に物をれもはせるか左様ではあるまじ素より我心に物思ひがあり。又我心に憂きことのある故に。月を見ればおのづから物かなくなる事であるのに。夫を月にかこつけがましようこぼる、我涙かあとい

ふどの意味であります。加様のわけで如何に形骸は月見に出掛ても。又花見に出掛ても雪見に行つて見ても。決して快樂なものではありません。然るに世の中の人々は唯形骸の物欲のみに奔りて。精神上の快樂を取ることを知らざるが爲めにいくらヤン觀月だの雪景だのと云つて見たところが。眞の精神上の快樂を得なければ。彼の歌の如く却て月其者が悲みの媒介者となるまで。何等の樂の種とはなるものではありませぬ。去れば眞に快樂を得んと欲するものは。形骸の樂を望み求めんよりは。先づ向きに精神上の快樂。精神上の安心を得なければなりません。然らば其精神の安心を如何にして修得すべきかでありますが。之れが宗教信仰上必須の必得であります。先づ我々が現在世に處して行くに就て。必要欠くべからざるものが四五點あります。先づ第一に『勤勉』と云ふことが必要である。則ち何等を勤勉するかと云へば自己の業務をつとむるのである。其自己の業務をつとむるは何等の爲めであるかと云へば。所謂四恩の爲めには一日も懈怠なく業務を勤勉するを要するのである。四恩とは三寶の恩。國主の恩。父母の恩。衆生の恩と云ふ四個の恩義のことである。我々は三寶のましますありて能くこの大法を受得することができたのである。其法と謂ひ。道と謂ひ。教と謂ふものゝ。何にもものたるを知り。夫を踏行ふことができるのは。皆この三寶の賜物であります(尤もこの三寶には慧慧、別慧、或は

絶待上の、三寶等種々の解釋あれども今は三寶解釋が主となりて所らぬから略して置きます)夫れを思ふても自己の業務を勵んで報恩的行動に出でなければならぬのである。又國主の恩徳なり。父母の恩徳なりは。いづれの教に於ても。また欠くべからざるものとして。教へてある位だから。本宗を信ずることを得たる。別ち正義正法を信得することを得たる幸福の身は。猶一層の喜びを増して。其國主の恩に報ひ。又は其父母の恩に報うところがなくてはなりません。又衆生の恩と云ふものに至りては。異教に之れなき實に廣大なる相依相愛主義である。社會相互の生活を圓滿に導く廣大なる親愛主義である。夫れだから自己の業務を勤勉するに就ては。この四恩に報うところがなくてはなりません。一日も懈怠なく業務を勵まなくてはなりません。然るに怠惰にして日々ノラクラ日ををれくり。又自分には不自由がないからと云ふて。懈怠安逸を貪り居る者やら。又縦し勤勉して居つても。其勤勉の目的を誤りて。唯利己主義一邊に奔り。我利々々主義の人間になつて仕舞て。今云ふところの四恩に對する杯の。去る温情高潔なる考へは段々に薄らぎゆく者が。多く出來る様では。實に國家風教の上に一大注意をせねばなりません。元來人間は食ふがため。又着るがために。生きて居るのであらうか。否なソではあるまい。ライフ則ち人生なるものは。モーンソット大なる要件があるのである。然るに大概は着るため

食ふために。生きて居る様に見へる。就中婦人などは殆んど着るためにでも。生きて居るかの観がある。依て人間は第一に何んの爲めに食ひ。なんのために着。又なんのために遊ぶかを知るのが大切である。一度思ひ茲に至れば。人生なるものゝ趣味を解し得て。幾斗愉快に活動し得るも亦知べからずである。この勤勉と安心とは實に唇齒の關係があるから。本宗信者としては。現世に處して四恩の爲めに一日も懈怠なく勤勉を要すと云ふ所以であります。

次に「慚愧」と云ふことが必要であります。我々が日々心にねもひ。身に爲すところのことに就て。果して人倫上背くところはなきか。道に於て違ふところはなきか。義に於て背くところはなきか。殊に又本宗信者として恥づるところはなきか。法に對し宗に對して疵づるところはなきか。信者たるもの心得として。間違た行動はなきか。始終心に慚愧し反省して行かねばならぬ。茲に至ると古來より本宗の信者は。彼の具足論の誤解應用からして。遂には相待善と。絶待善との關係應用を誤りて。世間普通の人にも。猶且劣れるが如き陋劣なる性行に。了るもの少からずであります。尤もこの信徒なり僧侶なりの各方面より觀たる。所謂僧侶觀。信徒觀とも云ふべきものに對しては近頃別に其觀察點を蒐録せしものあり亦時機を得て出すべし。如何に本門の妙戒。具足根本戒を持ち居ればとて。世間普通の倫道則ち。相待善を無視する譯

心の飢を救ふの法

三上真龜遁舍

天變地天飢饉來
斯かる悲惨の時に於て飢たるものに糧食を興へ窮するものに資を投ずるは、是れ人として當然の行動である、決して自己の腹のみを充たし枕を高ふして夢を貪る事は出来ない、而し哀れなる飢饉の慘狀は年毎に懸續するものでない、故に幾年ならずして原狀回復が出来るのである、されども茲に富者でも學者でも迷るゝ事が出来ない大饑饉が起つて居るのである、しかも年毎に凄まじき勢に驅られて全世界を荒して居る大饑饉である、それは吾人の肉躰が朽ちて死んでも残つて居る靈魂の大饑饉である。

靈魂の大饑饉、是れ人生界の立場より見て世界に於て其れより恐ろしいものはない、然るに人間は生命なる靈魂が、眞に哀れなる状態に零落して居つても、生々活動の光明を拜求するものが少ないのである、諸君、今の世の趣向を御覽なさい、宗教に對しては無用とか利用とか教權主義だの種々の論評を加へるのみであつて、一點信仰の熱はなく、未來の賞罰觀念を失ふて居るが爲に社會上の正義公道をも蹂躪して日に日に煩惱の迷妄に呻吟して居るではないか、あゝ吾等の近き將來の斷案には、永遠の地獄に葬らるゝ宣告に接するのである

には行かぬのである。絶待の大善を奉持する位であるから、無論相待善は能く持たれて居るべきである。唯本宗の究竟の心得としては。相待善と絶待善と二者の中、其一を取るべき急處に至れば。進んで絶待の大善を取るべく心得ねばならぬのみで。平生の場合には決して相待善とて軽く見たり。又なげやりにして置くべきではありませぬ。之を要するに我々は常に心に慚愧するところがなかつたならば。唯憍慢に流れ。嫉妬に陥り。沒徳義。沒人情に。なつてしまふのである。故に聖祖は進んで彼の絶待善を取らんとし玉ふ時は。いつでも生命を鴻毛の輕さに置き玉ひてあります。さりどて又相待善を取らるゝ時分には。實に懇切に徳義人情の堂奥と穿ち得て御示になつて居ります。所々の御書に多々之あり。今云ふところの我々に慚愧を要するは。相待善の上に於て心にやましかところはなきか。又絶待善に對して背くところ。違ふところはなきか。相絶兩待に鑑みて慚愧すべきである。本宗の信者は多く絶待善に失敗するよりは。寧ろ相待善の側に於て失敗して居るのが多くある。大に猛省すべきであります。これより猶人生の苦樂觀及び信仰上の心得を陳るのでありますが一寸一休します。(以下次號)

此等は煩惱の惡魔が吾等の内界に入りて罪惡の行爲を取てせしむるからである、煩惱に酷使せらるゝ人間、其は業に己に心の生活は停止せられ亦生々の息の根は絶へて無のである、嗚呼恐るべきは信なき煩惱の罪である、此の罪や心的飢饉の最大原因である、諸君、近き我國の飢饉の慘事の時には各人が常に味も知らざる草木によりて、只腹を満たし飢饉を凌がんとして食ふのであるが、靈魂の饑饉時代に於ても亦之と同じく心内の満足を得んが爲に、幾多の對象を見つけ出して雜種の物を詰め込むのである、而れども是れは一時的である、永遠無限の力を得ることば出来ない、恰も酒のために肥満したる人の如く其實質の衰弱して居るは是れ當然の事實である、而して心的飢饉に就て鐵物や名譽を以て救治せんとするは愚の極みであつて斷じて不能である、而らば此の恐ろしい境界から救ふのは、何物であるか、之は飢たる人間同士でない、人間の同情には限りがある、其れは驚くほど廣大無邊なる救ひの力を有つて居る慈悲の血塊たる久遠の佛様である、此の佛様は畏れ多くも毎自作是念の大悲願のために日夜御苦心遊されて居るのである、此の救済の實際の力は科學や哲學などの後補は要らない、本佛の本因本果必然の作用にしてさらに疑を容るべきものでない、あゝ聖祖日蓮は久遠の御弟子たる上行菩薩である、今より六百五十年の古往に於て哀れなる我等の祖先に救ひの聖

聲を傳へて、圓滿なる佛陀に接近せしめんとし玉ひたのに、
反て時人は今の我等には想像も及ばざる暴行侮辱を加へたの
である、まことに吾等の祖先は吾等を救ふの聖祖日蓮を苦し
め悩ましたのである、あゝ吾等の祖先は粗暴なる罪人である
されども聖祖日蓮は斯かる罪惡の人々をも尙逆縁の成佛なり
とて慈悲の涙を垂れ玉ひたのである、何んと難有ひ聖聲では
ありませぬか。

諸君、若し罪惡の雲がら脱け出で、立流なる清ひ心身を得よ
うと思ひなさるならば、はやく信仰の手を伸ばして佛陀の無
限の慈悲に接しなさい、其の因位の修行の功徳によりて必ず
圓滿なる進化を得らるゝのである。

諸君よ、佛陀の慈悲は無限にして廣大である、奈かなる哲學
者でも金満家でも之に憑依せざれば眞實なる慰安は得られな
いのである、夫故に諸君は斷然として社交や親族や家族やの
情實の纏綿を絶つて信仰の直道に來るべきである。

諸君、若し全くの救を仰がんとするならば在來の私利我慾を
制止して生活の中正を保つて、而して至誠の信念を凝らすな
らば、忽然一大妄想の雲は拂はれて、修顯得躰なる覺りの月
は現はるのである、諸君、今の時こそ久修業所得の金文と
實地に心讀して、獻天踰地の思ひに遊ぶ事が出来るのである
何んと有難ひ事ではありませぬか。
お、諸君よ、一刻も早く眞實の信仰を悦び起して心の饑饉を

治療するに努めなさい。
希はくは、悉是吾子との給ひたる久遠の佛様には、淺間敷
吾等に攝取の聖手を垂れ給ひなにとぞ佛子たらしめ給ひ云爾

來者不拒

紅涙の池上

學 兮 生

古槍老杉鬱蒼として、金碧炫耀の大伽藍を包める池上の山
は、今又夜の暗黒に蔽はれて、只もう一面に黒幕を張つたや
う……、萬籟寂として、天地さながら死せるが如く……
われは今悄然と破窓に獨坐して、靜に幽思に耽り、知らず
寂莫の三昧に入つたのである。

ろのかみ聖祖が、見渡す限り茫々たる武藏野に、尾花かる
かや女郎花、秋草乱又の間を分け入りて、長汀水澄み、白帆
遠く流るゝ多摩川に沿ひ、山は神代の老樹天に參して、沙羅
木の昔偲ばるゝ此處池上の地に、日暮御足を濡がせ給ひしは
わはれ今日此頃のとであらう、斯くて幾日もなく、あたら萬
世の師子主聖祖上人は、遂に門子檀越歎歎悲泣の裡に、六十
路に餘る老軀を残して、非滅の滅、常住涅槃の雲に隠れさせ
給ふたのであつた、
悲しからずや、千古の偉人、人世の教主は遂に冥目、靜に

此池上の地に眠りて、復び救世の福音を聞くに由なくなつて
了つた、此時多摩川の秋風は、六合の悲哀を吹き渡して、蕭
々として鶴林の枝を鳴したであらう。
されど星移り物代り、世の漸く流るゝにつれ、道義亡び信
念荒みて、世は復び無明の闇に鎖されつ、あたら靈山にまが
へつべきチャーチも、今はもう濁つて了つた。ア、世は末な
りし、澆季なりし、聖祖晩年の淨き尊き光明の歴史をたゝへ
て、眞淨大法の清風長へに福音を傳へ、本化別頭の乾坤翹か
に微妙の讚美歌を奏でたりし池上の山、今や之れ何たる状で
あらう。

魍魎魍魎圍山を蹂躪して、釋王殿の燈影はのくらく、野狐
毒理滿林に跋扈して、祖堂讀誦の聲を聞くに極めて稀れ、卓
り長榮堂の萬燈は燦然として山の南面を照し、堂内素に陀羅
讀の聲喧し、祠の前に跪いて、叩頭野狐を拜む僧はあるも、
大堂に詣て祖影を禮する信者は、正にこれ爪上の土、稻荷に
丑の刻參りして、商賈繁榮勝負全勝を祈る人はあるも、佛祖
に佛法王法の隆大正明を念願するものは千中無一。

之れが昔は聖祖入寂の聖跡、宗門樞要の靈地に於ける信仰
の状態である。昔と今、今と昔、噫人は想ふて、如何の感に
打たれるであらう。云ふまでもなく、義人は將に泣くべく、
志士は大に憤慨の腕を扼するであらう。而して之れ果して祈
るものゝ罪で、祈らざるものゝ罪ではないのか??

噫池上の山、無殘や長へに濁つて了つた、流石の聖跡も今
はもう穢れて了つた。これでも聖靈今猶此處に在ますであら
うか??

恸う想ひつゞけた時、ふと我に歸れば、殘燈影くらく、窓
外の樹梢さわくと鳴り渡れば、天の彼方雲は南に流れて、
瞬く星二ツ三ツ。天語らず地云はず、聖靈又轉た沈黙。
(九月下流無常神之)

窮衢の塵 (其二)

鳴流舎主人

我は世を厭わず、世にある怨恨の風、憤怒の雷、悲哀の雨
を厭ふ、欲陷の世界何れの處にか之を逃ぐる事を得る、山か
川か、華嚴の瀧か、煩絶、悶絶、懊恨我心暫くも安からず
憐れなるものよ、汝は食ふに物なき乞食にあらずや、親に
見放されたる窮子にあらずや、棲むに家なき天竺浪人にあら
ずや。
佛の世界は怨恨の風吹かず、憤怒の雷も聞へず、悲哀の
雨も降らず

衆生見劫盡、大火所燒時、我此土安穩、天人常充滿、乃至
諸天擊天鼓、常作衆伎樂、の世界なり
汝憐れむべきものよ、汝佛の世界に入るを希はふ先汝の汚
れたる衣を脱げよ、虚偽權詐を以て作れる汝の假面を剥げよ
而して一心湛然として佛の教を信せよ。
敢て告ぐ、信は佛の世界に入る關門なり、悟りの家を造る
礎なり

眞の偉人は狂者に似たり 録内十七卷に曰
 日蓮は此關東御一門の棟梁なり、日月なり、龜鑑あり、
 眼目なり、日蓮去るときは七難必ず起るべし
 誠や、滿天下の不具者を一肩に背負ふて、劔の山も血の川
 も意とすればこそ、一切平等に佛の慈悲に浴せしめんとなす、
 何ぞ其自負力の強大なる

上人の前には位も爵も貴も賤も男も女も富も貧も一切平等
 に映するなり、其渾身の心血は一切平等に同情するなり、上
 人は常に熱す、冷かならんとするも得ず情の激する所、哭し
 て且つ憤る、其哭するや大、荒れ狂ふ波濤も爲めに止み、其
 憤るや大、龍蛇も爲めに其頭を垂る、燃血熱情、又一種の狂
 氣を帯ひずんばあらず、 嗚呼、眞に偉大なる哉、末法の
 大導師

借問す、汝ぢ日蓮門下の正信教徒と自唱するものよ
 汝渾身の心血は果して上人の夫れの如く燃えつゝあるか、
 汝の情は果して上人の夫れの如く熱しつゝあるか、汝の垂る
 涙は果して貧富貴賤の門に依て異ならざるなきか、あやし
 まずんば非ず、今の世の自免正信徒、剃ぎ去れよ汝ぢの假面
 を、剃ひて跪いて合掌して靜かに佛天の御指導を持って

功利唯物の文明は世を擧げて功利唯物の人となせり今や、
 社會は否として此の種の人と爲り終りぬ、政治界と云はず、
 教育界と云はず、更に進んで宗教界に迄功利唯物の惡病毒は
 傳染せり、甚しい哉、惡病毒、爲めに人は、左顧右眴、唯實

利を以て的とするのみ、彼等の前には正しく義なく慈なく愛
 なし、献身と云ひ、不惜身命と謂ふ非實利的の事彼等の得て
 成し能ふ所にあらず、

弊れたる組袍を着て狐貉を着るものと立ちて耻ぢざるは大
 人の意氣なり、麻の衣に麻の袈裟、堂々社會に押出し、二陣
 三陣、直前邁往、獅子吼の勇あるもの之れ宗祖上人の意氣な
 り、

今の世の宗教家、紅顔にして心に老の波よせたる青年宗教
 家、汝大宗教家日蓮の法水を吸ひと自稱するものよ、可恐、
 傳染病の惡毒は早くも汝の肺中に入れり知らずや汝、汝何故
 に眞摯ならざる、熱誠ならざる、將亦洞然たる進取の靈火な
 き、
 醫せよ病者、悟れよ迷者、今にして消毒せずんば病遂に汝
 を殺さん

聖祖門下檀信徒に示す

金澤 紀野 俊耀

あゝ「自然」かもたらせる秋は已に半ば過ぎぬ、滿目の光景轉
 た寂莫として、ろよ吹く秋風尙世の無常遷滅を落葉する木々
 と相語れるが如くならずや、
 あゝ知らずや秋は回顧の時也、反省の節也、余は此の季を以
 て聖祖門下檀信徒に大なる反省を促がさむと欲す、換言せば
 檀信徒としての天分を自覺せよと告ぐるにある也

聖祖日蓮教を我邦に開てより春秋を閱するこゝに六百五十一
 豈短年月也とせむや「本門の本尊妙法蓮華經の五字を以て開
 浮提に於て廣宣流布せしむる歟」と云ひ「天四海皆皈妙法」
 と云へる者は是れ聖祖が救世の大音聲也、別付佛敎使の未來記
 也、然して之を成滿せしむると否とは全く門下僧俗の天分を
 知ると否とにありて存す、往事は問はず之れ死者に違つに似
 たれば也、然れども思へ前車の覆がへるは後車の戒め也、現
 代の聖祖門下檀信徒未だ長き夢より覺めざるにあらずや、
 熟慮せよ諸氏、菩提寺に參入せるを以て檀信徒也と云ふ勿れ、
 宗門雜誌を購讀するを以て檀信徒と云ふ事勿れ、開宗紀念大
 會に東都に馳せ登りたりとて憶面なく檀信徒也と誇稱するを
 己めよ、況むや萬燈大鼓に仁輪加と眞似て得意然たるドンド
 ッ法華發狂法華に於てをや、到底檀信徒を以て目するを許さ
 ざる也、之れ却て高遠なる宗義と敬虔なる眞信仰とを消磨す
 る魔徒ならむのみ

余を以て假に當代日蓮門徒と稱する者の内容を露出せしめ
 よ、蓋し左の三種に皈するを得む歟「遺傳的名目の者」「多神
 教的迷信の者」「本因妙位的正信の者」之れ也前の一は根本的
 信不具足一闡提の徒と云ふを得べく、此類に自から二種ある
 べし一は家代々法華宗なるが故にどの見地よりして、僅か籍
 を宗門檀信に置き、口吟みに唱題せるに止まり何等高遠なる
 信仰なく、佛陀の實在を確信して大慈大悲の御手に救はれむ
 と欲する者にもあらず、既に已に精神的無宗教者に墮落し終
 れる也、亦一は科學哲學氣取に赤凡夫の者知りたりげに無宗
 教論を振り舞はして、眞摯なる信念をも迷信よばはりする者

輩之也、而して此二類は多く青年壯年に見る處也とす

次に多神教的迷信の者、是は前者の如く信念なきにあらざる
 も、自家の宗義を辨せず、大本尊の尊容に浴するを知らずし
 て、凡夫の轉倒見に任せ、猥りに祖誠を破り東奔西走日も尙
 足らざる底の雜炊法華之也

次に本因妙位的正信の者、之は如法の導師に依て、心田に無
 二の正信を下種せられ、三秘の宗是を崇め信念受持の法規に
 順ひ以て眞摯なる信念を把持せる者之也

已上分類せる三類の徒にして前二者は、共に宗門檀信の大部
 分を占有し、後の正信に任せる者に至ては實に少數なるを見
 る、廣布の大願未だ曙光遠きにある、亦故なきにあらざる也
 あゝ

余が斯く論じ來らば、諸氏等必ずや云はむ、僧侶は導師也檀
 信は被導者也、師は針の如く弟子は糸の如し、檀信徒の誤ま
 れるは僧侶の教導其宜敷を得ざれば也と、一往其理あり、然
 りと雖も檀信徒其れ自身が、信仰の内面的省察を成さずし
 て、或は信念を否定し、或は放逸無殘の迷信を敢てし、直言
 する者を嫌ひ、倍々感流の底に沈まむとし、以て其罪を悉く
 僧侶に飯して平然たるに於ては、豈一言なきを得むや
 師檀元より深き結縁あり、聖釋尊、經王法華に金説して曰く
 在々諸佛上 常與師俱生 若親近三法師 速得菩薩道

隨順是師學 得見恒沙佛

と聖祖上人慈訓して曰く

師檀トナル事ハ三世ノ契リ、種熟脫ノ三益別人ニ求ンヤ
 と、若し夫れ然らば、其尊敬する事君臣の如く、其篤厚なる

事父子の如く、其和合する事夫婦の如くならざるべからざるは是れ師檀相互の關係にあらざるや、果して然らば君の失を見諫めざるを孝子と云ふを得べきや、父の誤されるを知て諫めざるを孝子と云ふを得べきや、夫の罪を犯すを聞て強諫せざるは、貞女たるを得べきや、師檀亦然り師の如法ならずして天分を忘却するが如きあらば若諫以て廣布を計るべき也、然るに罪を悉く師に負はしめ己れ亦卑賤なる信仰に甘んじ醉生夢死に終る如きは、豈に檀信の天分を盡せる者と云ふを得べきや、諸氏等三度で思をこゝに致して可也

現今宗門の不振は信仰の薄弱に由來す、信念の微薄は遂に弘教的行動を嫌忌する一大病因也、淫祠的勸信を喜ぶ根本的惑源也、斯して遂に念佛無間論、謗法墮獄論を唱導するを潔とせざる失本心故の檀信徒とは化したる也、立宗の根本義たる大本尊に向て一向に純一ある信仰を捧ぐるを忌み、久成本佛の實在を忘れ、鬼子母神法華、清正公法華、七面法華果ては、狐狸崇拜に萬燈大鼓で狂ひ舞ふ、毒氣深入の檀信徒と化したる也

あゝ恐るべきは信仰の衰退也、故に宗祖は信心の微弱なるを以て、阿鼻沈淪の輩と定判し給へり

心ニ二マシ、テ信心弱ク候ハ、峯ノ石ノ谷ヘコロビ空ノ雨ノ大地ニ落ルト思食セ大阿鼻地獄疑アルベカラズ其時日蓮バシ恨ミサセ給フナ、返々モ各信心ニ依ベク候

嚴乎たる聖訓、一點の疑義を容るゝを許さむや、諸氏等如上の聖語を至誠服膺し、上來例擧の迷妄の濁信を大本尊の御前に發露消滅を念じ、妙法の光明と本佛の靈應に乗して迷へる

統一團報

記者曰本月は諸方より山なす通信投稿ありて到底限りある紙面に悉く之を掲載する能はず因て本報には先着分より掲載することとし餘は遺憾ながら次報に掲載する事となしたり

顯本法華宗神戶婦人會創設主意書

聖祖ノ金言ハ萬古不易ノ大真理ニシテ御在世以來今ニ六百八十餘年此間常ニ着々其適中ノ實證ヲ示顯セラレ爲ニ信不信ノ徒モ等シク歎稱心服スル所ニシテ、マシテ吾人等渴仰懽慕セラル信徒ニ於テハ尙更深ク其金言ノ實現セン事ヲ確信シテ毫モ疑ヲ容レザル所ナリ今ヤ其實證トシテ顯本法華統一ノ時運ハ漸ク熟セントシ各地相競テ廣宜流布ニ熱中シ將ニ近キ將來ニ於テ大ニ勇飛ノ大策成ラントスルヲ耳ニセリ此時ニ當リ關西ノ咽喉樞要ノ地タル吾神戶ニ於テモ爲ニ何ガナ書策スル所ナカルベカラザルヲ思ヒ其準備ノ第一着手トシ益々内部ノ根底ヲ固メ地盤ヲ金剛ナラシムルノ必要ヲ感シ爰ニ顯本法華宗神戶婦人會ヲ創設シ先ヅ近クハ一家々庭ノ上ニ於テ堅固ナル信念ノ基礎ヲ築カシメ一家團欒異体同心ノ實踐ヲ確立シ進んで廣ク神戶同信ノ一門進退ヲ規一ニスルノ好手段ヲ畫キ愈々進んでハ全國ニ於ル本宗同信ノ門下大運動ノ時ニ際シテモ一呼一應恰モ一己身ヲ操縦スル如ク自由自在ニ爲法爲國ノ信念ヲ實行スルノ好模範ヲ作ラン事ヲ期ス抑モ婦人ノ一家、一國ニ負フ所ノ責任ノ重大ナルハ今更喋々スルノ要ナシト雖モ而モ特ニ吾邦今日ノ情態ニ鑑ミ益々其大任重責ナルヲ思フト

僧徒と諫告し、如法の導師に信順して現當二世の大益を感受し、以て正法鼓吹の開導者は「統一」の下に馳せ來て、魔軍折伏の英氣を倍增せしめよ、之れ外護の大任を全ふする者也、祖聖判じて曰く

受ガタキ人界ニ生ラウケ、逢ガタキ佛法ニアヒ、殊更三世ノ諸佛出世の本懷、衆生成佛ノ直道タル法華本門ノ信者トナリナガラ、信心疎カニシテ惡趣ニ墮ン事、ハカナキ事也相携ヘテ、信心強盛ニトリ臨終ノ夕ニ即身成佛ノ開悟ヲナシ、釋迦上行等ノ覺位ニ登ランコト本門壽量ノ教主ノ金言ヲ信シ、南無妙法蓮華經ト奉レ唱、功能ナルベシ

あゝ諄々たる慈誨、唯喜び身に餘て、思はず南無妙法蓮華經と唱へ奉るのみ

あゝ秋は反省の好時代也、世人が十、二十及乃至百年の過去を思ひ、亦明年乃至若干の近き未來を慮るの時、聖祖門下檀信諸氏、無始久遠劫來の大なる過去を思ひ、妙法五字の光明に照されて謗法不信の重障を消滅せむ事を欲し、無終の未來に慮ては強盛深重の信念の利劍を以て流轉生死のさづなを切らむ事を願ふべき也、南無妙法蓮華經

文中分類せる三者に對して宗義上の説明を與へむと欲するも紙數限りあれば亦々相まらぬむ



同時ニ大ニ其價直ヲ高ムルノ必要ヲ感ゼズンバアラズ即チ家庭教育ノ上ヨリ見ルモ社會風教ノ上ヨリ見ルモ婦人ノ價直如何ニ依リテハ其家眷、其國民ノ情性、品位、文野、強弱ニ根本的ナル大影響ヲ及ボシ大關係ヲ有スルハ明カナル所ナルヲ以テ衷心實ニ此事ヲ以テ大事ナリト思ハニハ宜シク婦人ノ價直ヲシテ歩一步進ムルノ手段ヲ取ラザルベカラズ日蓮ノ御遺訓ニモ女人ト妙ノ字ト釋尊ト一体ナリト仰セ玉ヒシ御文サヘアリテ婦人ハ實ニ社會國家ノ存在スル根底ナルヲ以テ從ツテ此際奮ツテ根本義タル我顯本法華宗ノ標榜シ發揚スル法華經本門壽量ノ妙法ヲ受持セシメ真正ノ宗教觀ヲ教エテ佛性ノ感發ヲ促シ外ニハ正義正道ノ爲ニ勇奮スルノ活氣ヲ養成シ内ニハ確乎不拔ノ純信念ヲ堅メ慈愛、悲愛ノ真味ヲ味ヒ家長ヲ助ケテ家眷ヲ撫育シ圓滿愉快ニ家政ヲ擅スルノ技倆ヲ養成セシムルコト大々必要ナリト信ズ此ノ如クナランニハ則チ婦人ノ價直ヲ最上ノ程度ニ高メタルモノニシテ其結果ヨリ生ズル一家、一國ノ幸福眞ニ量ルベカラズシテ知ラズ識ラズノ間ニ於テ善ク爲法爲國自利々他ノ聖訓ニ應ズル事ヲ得タリト云フベシ吾人ハ此信念ト此希望トニ依リ爰ニ同志相謀リ以テ婦人會ノ創設ヲ發起セリ冀クハ家ヲ思ヒ、子ヲ思ヒ、身ヲ思ヒ、君ヲ思ヒ、世ヲ思ヒ、國ヲ思フノ淵德ノ良婦人速カニ來ツテ入會シ如上ノ主意ヲ實踐セラレン事ヲ乞フト爾云

明治三十六年九月日

顯本法華宗神戶婦人會發起人一同謹白

右婦人會發會式の景況を得たれば左に掲ぐ

發會式舉行の景況

十月三日天氣快晴早朝より諸般の準備に取掛り先づ布教所門前及び有馬道筋の通りには顯本法華宗神戶婦人會發會式てふ大廣告札を建て隨意參禮を促し置たり而して特に記すべきは信徒伊保きし子は擧式を盛んならしめんため生花供養を奉らんとて其弟子七名を引連れ又信徒中の婦女子もまじりて早朝より花瓶花卉時を得顔の秋草など運び來りて正午頃迄に整然十又六疊の生花を御寶前に献せられたりしかば式場爲に一層の光彩を加へ優美と壯嚴とを増し淑徳清淨なる婦人會の面目もかくや思ふ斗りの有様となり且今回の發會式につき共に隨喜の心深く朝より來參して發起者を助け總ての準備に勞せられたるは姫路市の信徒鳥越勘一氏及び當市内藤好洋氏にして是又持筆すべき佛事なりとす且信徒の婦女子も午前中より追々參集し來りて會員名簿に記名を申込む等其熱心の現はるゝ所實に愛すべき清淨無垢の威に打るゝ程なり午後二時の定刻に先ち導師より發會式の差定を告示せらる其順序左の如し

- 差定
- 一 方便品、自我供、御題目
 - 一 役員 推薦式
 - 一 會員祝詞朗讀
 - 一 會長 祝詞
 - 一 隨喜員演説
 - 一 導師 法話

以上 愈々定刻に至り以上の禮拜供養の式を擧げたり導師より役員推薦狀を渡さる即ち左の如し

事品を拜讀して、聖祖の御遺訓を引證列擧して末法今日に於ける婦女子は特に大果報よき方々にして婦人は特に一家一國の根基たる事を詳細に説明せられ、信仰は内部を守る婦人に於て一家一國の土臺として必要なるを説き本門壽量顯本の妙法を信受し奉る者の福壽量るべからざる事を懇切に教示ありて降壇せらる、會員及び一同愈々法雨に霑ひ信念の嫩芽大に生育したる様見ゆたり爰に於て全く式を終り閉會を告げ一同思ひ／＼に退場せり。時に午後七時なりき、本日擧式の時間中會員等一同誠に静寂端嚴の容体にして總ての光景流石に淑徳なる婦人會の体面に耻ずほどの批評者もありき而して本日參集の會員及び隨喜員等合計四十餘名(會員名簿等は別帳にあり)、にして誠に萬年の土臺を祝する儀式に參集し得たる一同の果報無此上幸福にて少數の信者を有する神戸に於ては割合に盛會なりと云ふべし、悦ばしきかな、喜しきかなや、此地將來顯本の光輝愈々加はり妙華開いて一同妙果を詰ひ皆歸妙法の金言を實現する事を得んか

記者曰く新谷菊江子、上田さみ子、重松玉江子等の祝文ありしかも都合により次回にまはす

●監督布教

顯本法華宗監督布教師本多日生師は隨行員今成乾隨山根顯道師等と共に本月十日より千葉縣各教區監督布教相成し由本宗告示にありたり

●岡山通信(第一)報 篤信會報

例の篤信會の報道仕候

客十月四日此の夜は彼の舊明月の前夜なり、我篤信會は姫路

以上の如く推薦の榮を受けたる會員は共に承服の旨を言上し夫れより會員新谷菊江、井に上田さみ子は演壇に進みて下の祝詞を朗讀し次に副會長重松琴江も祝詞を朗讀し次に伊保會長に立ちて會員一同及び參集の隨喜員に謙遜的なる挨拶を述べ本會の成立を祝するの辭を演じて降壇せらる次に隨喜員鳥越勘一氏演壇に上りて先づ本會々則の短簡にして其意深遠なるを稱し神戸に於て本會の成立したるは誠に佛天の加護を證したるものにて本宗の爲め將た各會員のため滿腔の誠意を以て祝賀する旨を述べ本會は吾宗婦人會の模範たるべき様内部の整頓外部の擴張を祈る由を告げ尙本宗統一の主義を演べて約一時間熱心に演説ありき時に午後四時過ぎ、爰に於て兼て準備ありし寫眞師に命じ一同布教所門内の廣庭に出で、撮影し數分時間休息、夫より又も一同式場に着席せり時に發起者重松玉次氏演壇に上り本會の主意のなる所を短簡に説明し尙かく本會の成立ありし上は會長初め會員一同に於て益々本會の隆盛ならん事を務めらるべきは勿論なれども我々隨喜員たる男子部に於ても外側より大に本會の爲め扶掖する所なかるべからざる旨を述べて降壇、最後に於て導師上田智量上人登壇先づ今回かく意外に易く如此大事なる婦人會の組織せられたるは日頃各員の信仰心強盛なるを證するに足るものにて誠に自他一同の悦びなる旨を告げられ夫れより法華經藥王本

の野老師を聘して演説會を開きぬ

地獄と極樂……松崎 事成
人壽を論ず……高矢 順一
佛教信仰の根本義……能仁 事一
佛敎の二大潮流……野老 乾爲
然るに時少しく後れて讃岐の保江氏來着し、直に登壇しての演説あり、閉會後篤信會役員と共に庭松の下に於て觀月の清莖を張各自胸襟を開きて法味快談して隨意散會せり

●岡山通信 篤信會員 横山 生報

前畧我篤信會には去る八月廿四日午後八時より山崎町本行寺に於て大演説會開催致し申候、其演題と辨士は左の如くに候

開會之辭……山名 木本
何ものにも勝つ方……能仁 事一
本尊之稱は信心之根本義……能仁 事一
又本月十九日も午後七時より同處にて相開き申候何に彼に準備は怠りなかりしに四時過ぎより俄に大雨降り來りし爲め來聽者少なかりしは遺憾の至りに候然れども大雨を冒し來會せる者開會までには四十餘名其信仰の熱心なる感服の外無之候故に當夜は辨士に於ても層一層の熱騰を以て廣長舌を振はれ申候演題及び辨士は

開會之辭……會 員
迷悟の本休どは何んぞ……松崎 事成
信仰は社會進歩の原動力……原田 容廣
妙法の大曼陀羅……能仁 事一

金波樓の講話會は能仁師他處布教日取りの都合により來月早

出版豫告

孝

論

附 男女權力論解決

●本『孝論』は根本的立場より眺めて孝養を論じたるもの也
 ●附『男女權力論解決』は男子權力論に對する男女同權論等從來疑問中にある男女の權力論に對する解決論なり
 ●要するに本二論は法華經主義絶待の見地より立論せしものにて『孝論』は親子の關係を明晰に了得すべく『男女權力論解決』は夫婦の關係を瞭然に了會するを得べし
 ●本書は本宗の篤信家石川倉吉君の贊助を得て發行するものなれば半は施本の心にて實費以下の定價を以て應需すべし
 ●本書の豫約定價は一部五錢乃至六錢位なり次號に委細廣告すべし
 ●本書は著者が義母の逝去に對する感慨の記述なり

東京淺草區南松山町
 統一發行部

十一月

岡 山 柿屋本
 吳 服 商 店
 主 店 久 城 茂 太 郎
 (電話二六〇番)

柿屋 店
 (岡山市上之町)

柿屋太物店
 (岡山市上之町)

柿屋南店
 (岡山市上之町)

柿屋北店
 (岡山市車町筋)

柿屋鼈甲店
 (岡山市中之町)

統一 (雜誌) 廣告

大阪市内便宜購讀申込所
 大阪市東區西高津中寺町菓谷
 百九十五番

信友會

廣告

私儀今般布敷上の都合に依堺市妙滿寺を辭職致し左記の處に住居仕り候間今後用向の御方は左様御承知置被下度此段廣告仕り候也

大阪市東區中寺町菓ノ谷百九十五番屋敷
 信友會主幹 溝口會 旭

義母ふさ義會て上京其後飯郷中の處本月十三日
 病氣の爲め死去致候間此段辱知諸君に告ぐ
 明治三十六年十一月

松尾英四郎

至急團告

○本誌に寄送の原稿は
 東京府下品川妙國寺統一團本部
 其他の用向は依然

東京市淺草區南松山町統一雜誌部

統一團

御

雛

附

小道具

武

者

東

人形

人形

形板

御注文に依り調製致候

東京日本橋通り十軒店

久月本店

中原福藏

(電話本局二千三百八十二番)

統一

第四百四號要目

- 勸信要義……………本多日生
- ▲三十六年を送る……………教文會
- 公德に關する佛教の教義を論ず……………影山謙二
- ▲晚。東天を仰いで……………西村翠童
- 日蓮大聖人(第十一回)……………關田佛城
- ▲遭難の辞……………藤崎通明
- 思連記……………故日達上人
- ▲描聲風語……………正法正太
- 旬餘の梵行(上下)……………青村忍水
- ▲誓願文……………松尾忍水
- 祝忍水得度……………山根顯道
- ▲各地通信等……………各地團員
- 答眞門流……………内藤智厚

(明治三十年二月廿四日 第三種郵便物認可 每月一回十五日)
 (全三十六年十二月十五日發行統一第四百四號)

佛旗六金色調進所 六金色僧表

| | | | | |
|-------------------|--------|-----|-------|------|
| 佛形別並品製上品製新友仙本友仙染抜 | 在家用廿二錢 | 廿八錢 | 卅五錢 | 五十五錢 |
| 寺院中四十三錢 | 五十錢 | 〇 | 一圓三十錢 | |
| 同極大七十五錢 | 八十八錢 | 〇 | 二圓二十錢 | |

右外別大特大最大數種●國旗本友仙染抜四十五錢
 御寺院用御幕●唐縮緬紫幕●天竺木綿及五郎丸白幕

京都市油小路魚棚南 吳服商 高橋正意

電話千二百八十七番

荏原郡部 品川町の

統一購讀諸君へ

一今般荏原郡部及品川町の本誌購讀料の蒐集方を

妙國寺寓 松尾英四郎君

へ頼囑せられたから、已來は必ず同人へ御拂込を願升
 一右統一代金は同人か又は同人の認印あるもの、は
 かは何人たりとも御渡しなさやう頼みます

統一團

品川「統一」購讀者諸君

一本誌代金不納の諸君は至急御送金ヲ乞

一雜誌交換、寄稿共移轉先へ願升

- 一本誌は毎月一回十五日を以て發行期日とす
- 一本誌は一冊六錢十二冊前金六十五錢郵券代用は一割増但五厘切手を其とす
- 一購讀申込の簡は住所姓名を附書にて認めらるべし
- 一爲替局は淺草區北松山町として御振込の事
- 一本團は別に領收書を發せし但し領收證を要する向は返信料を封入するか或は爲替振込の簡拂渡通知料貳錢を振出郵便局へ納付すべし
- 一廣告料は五號活字廿七字請每一行金八錢なり

明治卅六年十一月十五日印刷發行

發行人 井村 恂也
 編輯人 山根 顯道
 印刷所 鈴木 暉學
 北澤活版所

東京市淺草區南松山町四十五番地

發行所 統一團